

Ⅱサムエル4章「主の前に真実を」

一般の社会でも、自分の利益のためではなく、他者のために真実を尽くす姿は感動を呼びます。人に与えられている良心によって他者のために行動する方たちのことを様々な場面で見ることができます。そのようなことも神の恵み、一般恩寵によることです。

まして、神の特別の恵み、イエス・キリストによる救いをいただいている私たちキリスト者はなおのこと、真実に生きることができるはずで、神を愛し、隣人を愛して行動することができます。主の御前に真実に生きて、その結果、人々に対して真実を尽くすことができるのです。

1. サウル家の動揺（：1～4）

実権を握っていたアブネルが死んだことを聞いたサウル家は動揺します。イシュ・ボシェテは氣力を失いました。アブネルが自分よりも力を持っていることを疎ましく思っていたでしょうけれども、いざアブネルが死んでしまうと、これからどうしたら良いかと悩み、不安になったことでしょう。また、全イスラエルの民もおじ惑いました。全イスラエルをまとめていた実力者を失って、人々も不安になり、恐れしました。そうして、自分の身をどのように守るべきかを人々は考えていたことでしょう。

本来なら主の民はそのような時、主に伺うべきでしょう。尋ね求めるなら応えてくださる生ける主がおられることを知っているのですから。けれども、王は氣力を失い、民はおじ惑っているだけでした。

そのような中で二人の兄弟が登場します。バアナとレカブはベエロテ人リンモンの息子で、略奪隊の隊長でした。ここに、二人の兄弟がどのような背景の人だったかが説明されています。

ヨシュアのもとでイスラエル人がカナンの地を占領していった時期のことです。ギブオンの人々はヨシュアのもとに使者たちを遣わして、その使者たちは遠い国からやって来たかのように装い、自分たちと契約を結んで欲しいとイスラエルに求めました。騙されて契約を結んだ後に、彼らがカナンの地のギブオンの住民であることが分かりました。ギブオンとその近くのケフィラ、ベエロテ、キルヤテ・エアリムの4つの町の人々が使者を遣わしたのでした。彼らは聖絶されることなく、イスラエルの中に住むことになりました。

時代が降って、サウルが王になった初期の頃と考えられますが、サウルはそのギブオン人を滅ぼそうとしました。もともとはイスラエル人ではなかった彼らを、サウルはイスラエルに対する熱心のゆえに滅ぼそうとしました。そのサウルの手から逃れ、ベエロテ人はベニヤミン族の町ギタイムに逃げて、そこで寄留者となったということです。そうしてベニヤミン族に属すると見なされていました。

ですから、バアナとレカブはダビデとは直接的な関係はありません。そして、サウルと同じベニヤミン族に属しているのですが、ギブオン人の事件からサウルに対する恐れや恨みを持っていたのだらうと思います。

そのバアナとレカブが行動を起こします。しかし、そのことを記す前に、4節に一つのことが挿入されています。ここにヨナタンの息子メフィボシェテのことが書かれています。父ヨナタンが戦死した時、彼は5歳でしたから、このときもまだ子どもでした。そして、ここに記されているような不幸な出来事によって足が不自由になっていました。

このメフィボシェテはまた後の章で登場することになります。どうしてここでメフィボシェテのことが取り上げられているのでしょうか。彼はサウルの子ヨナタンの息子です。ですから、王位を継承することができる立場にあります。しかし、この時はまだ子どもですし、足の萎えた者だったので、彼を王にしようという動きはなかったということです。そのことを注釈するためにここに記されたのでしょう。

2. イシュ・ボシェテの暗殺とダビデの対応（：5～7）

ベエロテ人レカブとバアナが、日中にイシュ・ボシェテの家に来て来ました。「小麦を扱う者」のふりをして、変装をして、家の中に入り込みました。そのとき、イシュ・ボシェテは昼寝をしていました。二人は寝ているイシュ・ボシェテを難なく突き殺し、首を刎ねました。そして、その首を持って逃げて、南のアラバへ向かう道を一晩中歩いて行ったということです。

そして、二人はヘブロンのダビデのところに行きました。8節。二人は、イシュ・ボシェテの首を持って行け

ば、ダビデに喜ばれ、褒美を与えられ、部下に取り立ててもらえると期待していたのでしょう。「主は今日、わが主、王のために、サウルとその子孫に復讐されたのです」と自信満々に告げました。彼らは自分たちの行動が主のみどころにかなうことだと言っているようです。

しかし、彼らがイシュ・ボシェテを暗殺したことは、主のみどころにかなうことではありません。ダビデが喜ぶことでもありません。彼らが言っていることはこの世的な発想です。ダビデが神、主を信頼して考えることは全く違いました。確かにサウルはダビデのいのちを狙っていましたが、ダビデはサウルを敵とは考えていませんでした。主に油注がれた方であるサウルに自分から手を下すことはありえないと部下たちに公言していました。また、イシュ・ボシェテがダビデに対して何か悪を行ったということではありません。むしろ、ダビデはサウルと契約を結んでいました。かつてサウルが「今、主にかけて私に誓ってくれ。私の後の子孫を断たず、私の名を父の家から消し去らないことを」と求め、ダビデはサウルに誓いました。ですから、ダビデはその誓いを主の前で果たしていかなければなりません。自らサウル家を滅ぼそうとはしていません。

レカブとバアナの兄弟が考えていたことは全くの誤算でした。ダビデは二人に言います。9 節。ダビデの信仰がはっきりと表されています。「主は生きておられる」。自分自身のこれまでの歩みにおいて確かに主が御業を行ってくださり、「あらゆる苦難から贖い出してくださった」と告白しています。ゴリヤテと対決した時も、サウルにいのちを狙われて逃げていた時も、主が守り、助けてくださったと感謝しています。そして、その主の御前にふさわしくありたいという願いが込められています。

それに対してレカブとバアナが行ったことは主の御前でふさわしくないこと、断罪されるべきことです。そして、数年前にあった出来事と重なることです。10 節。サウルとヨナタンが戦死したことをダビデに知らせた者がいました。彼はサウルが瀕死の状態で自分を殺してくれと頼んだので、殺したと言いました。事実は違いましたが、主に油注がれた方を殺したと証言したゆえに、ダビデは彼を処罰しました。それが自分では良い知らせをもたらしたと思った者への報いでした。

今回の二人の行ったことも、それと同じようでした。いや、もっと酷いことだと言っています。11 節。ダビデは、イシュ・ボシェテのことを主に油注がれた方とは言っていないですが、二人がしたことを「一人の正しい人を家の中で、しかも寝床の上で殺した」と非難します。イシュ・ボシェテが何か悪を行ったわけではありません。二人は自分たちの利益のために正しい人を殺しました。無防備な相手を殺した卑劣な行いでした。それゆえに、ダビデは「彼の血の責任をおまえたちに問」うとして、二人を処罰しました。

二人の遺体はヘブロン池のほとりで木につるされました。これはさらしものにするということです。木にかけられることはイスラエル人にとって神に呪われた者であることを示しました。しかし、ダビデはイシュ・ボシェテの首はアブネルの墓に埋葬しました。

サウルとヨナタンを含む 3 人の息子が戦死したこと、サウルの軍の長アブネルが暗殺されたこと、そして、残っていた息子で王に立てられたイシュ・ボシェテが暗殺されたことのいずれにもダビデは関わっていないことが明らかにされています。ダビデには彼らの血の責任がないのです。

ダビデがサウルやサウルの家と対立していたように人々は見ましたが、ダビデ自身は自らサウル家を滅ぼしてイスラエルの王になろうとしたことはありませんでした。自分を選ばれた主を信頼し、主に委ねていました。「主は生きておられる。主は私のたましいを、あらゆる苦難から贖い出してくださった」と告白して、主への感謝と信頼と従順を表していました。

また、サウル家には、なおもヨナタンの息子のメフィボシェテが残されています。この後のダビデの真実な行動を期待させます。というのは、ダビデとヨナタンは主にあって契約を結んだからです。自分の利益のために行動した悪人たちを裁いたダビデは、彼らとは対照的に主の御前に真実に生きて、ヨナタンに真実を尽くしていく必要があるのです。

私たちも主の前に真実を尽くすことができるように祈りましょう。そして、主の御前に真実であることによって、周りの人たちに対しても愛をもって行動することができるように、真実を尽くすことができるように祈りましょう。